



保健師のおはなし

斜視や屈折異常などの早期発見のために

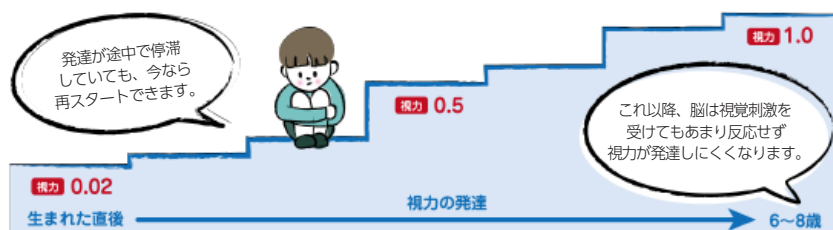
3歳児健診で新たに目の屈折検査を実施します

9月13日(水)の3歳児健診より新たに屈折検査機器を導入し、弱視の原因となる斜視や屈折異常(遠視・近視・乱視)のスクリーニング検査を実施します。今年度は、検査を受けていない5月、7月実施の3歳児健診の対象者から就学前のお子さんまで対象を拡大し、乳幼児健診の機会にあわせて検査を実施します。対象となるお子さんには順次案内を送付しますので、検査をご希望の方は案内をご確認のうえ、申し込みください。なお、9月以降に3歳児健診の対象となるお子さんは、送付される3歳児健診の案内をご確認ください。

3歳児健診の視覚検査は、目の発達を知るための大切な検査です。

物を見るためには、眼球だけではなく脳での視覚情報処理も必要であり、視力(※1)そのものは脳の機能です。目からの情報が角膜から脳へ伝わることで「目が見える」のです。また、視覚(※2)は「両目でものをはっきり見る」ことで発達しますが、遠視や乱視などによってピントのずれがあると視力の発達が妨げられ、「弱視」になります。片目の視線がずれ、両目の視線が同じ目標物を見ていない「斜視」では、左右の目で同時に異なる情報を脳に伝達するため脳が混乱し、片目の映像をシャットダウンしてしまい、使用しない目が弱視になってしまうことがあります。

子どもの視力は生後1か月では0.02ですが、小学校入学までには1.0までに発達します。この視覚の感受性期間(視覚刺激を受けて脳が反応し、視力が発達する時期)にはタイムリミットがあり、6～8歳以降は視力が発達しにくくなるため、発達の過程で弱視や斜視などの発見が遅れると十分な視力が出なかったり、治療に時間を要してしまうこととなります(図)。子どもは見えにくくてもその見え方が当たり前の中で過ごしているため、見えにくさは感じません。なるべく早く見つけて早く治療することが大切です。



【図】視覚の感受性期間(日本眼科医会「3歳児健診における視覚検査マニュアル」より引用)

- * 1 視力 対象物をどれだけ細部まで見分けられるかの能力を数値化したもの。
- * 2 視覚 視力のほか、視野(視界を広く見る能力)、光覚(光を感じる能力)、両眼視(両眼で立体的に物を見る能力)、色覚(色を見分ける能力)、調節力(遠方から近い物までを見るための調節をする能力)などを含む、視力より広い意味の言葉。

問ふれあいセンターTel. 52-2000

市の人口 ★7月末現在★ ※ ()内は前月比

世帯数 8,572世帯(-14) 人口 15,677人(-29) 男 7,277人(-17) 女 8,400人(-12)

編集後記

▶一人暮らしの学生時代に胆振東部地震が発生▶復旧まで3日程、オール電化のアパートで何もできず非常に困りました▶懐中電灯すらなく、ライブ用のペンライトで代用したり……▶災害への備え、大事です📌